

主体的な学習活動による「思考力・判断力・表現力等」の育成
～教師の主体的な研修をベースとした、生徒用タブレットの効果的な活用等による学習者主体の授業づくりを通して～

いちき串木野市立羽島中学校

1 研究のねらい

GIGA スクール構想による端末整備が進む中、本校では「端末を使うこと」自体が目的化し、本来の深い学びへの質的転換が伴っていないという課題があった。具体的には、全国学力・学習状況調査等の結果から、知識・技能に比して「思考力・判断力・表現力等」が相対的に低い傾向にあり、特に既習知識を別の文脈で活用する場面に弱さが見られた。また、教員側の課題として、研修が受動的なものに留まり、授業改善が個人の努力に依存している現状があった。そこで、生徒の「思考力・表現力」の育成を軸に、タブレット活用と教員の主体的研修を密接に連動させ、教員と生徒が共に「アウトプット」を通して学び合う学校文化の創造を目指した。

2 研究の概要

教員も生徒もアウトプットし合い、互いに高め合う「表現し合うコミュニティ」への変革を基本方針とした。まず授業においては、従来の教え込み型から、生徒の活動時間を8割確保する「アウトプットラーニング」の導入を図った。次に研修においては、教員自身が学び手として試行錯誤を共有する「個人テーマ研修」を導入した。さらに、これらの活動を支える基盤として、学校運営や生徒会活動のDX化を推進し、日常的にアウトプットが生まれる環境（文化改革）を構築した。この3つの柱を循環させることで、持続可能な学びのモデルを構築する。

3 研究の内容

- (1) 授業改革：アウトプットラーニングの実践
教員の役割を知識の伝達者から学習活動のファシリテーターへと転換し、授業のうち8割を生徒のアウトプット（思考・表現）に充てる授業スタイルを全校で推進する。
- (2) 研修改革：教員の主体性を引き出す研修デザイン「個人テーマ研修」
教員一人一人が独自のテーマをもとに共通実践事項を設定し、日々の実践や失敗を日常的に共有することで、教師自身が「試行錯誤する学び手」へと変容する仕組みを整える。
- (3) 文化改革：学校生活全般のDX化と発信機会の創出
生徒会活動や地域連携、探究学習において、ICTを活用した発信機会を日常化することで、目的意識をもったアウトプットと自己有用感を醸成する。

4 研究の実際

- (1) 【授業改革】アウトプットラーニングの実践
アウトプット・ラーニングは、授業時間の8割以上を生徒の活動（思考・表現）に充てる学習者主体の授業スタイルである。従来の教え込み型から脱却し、教員は、「学びを支える」ファシリテーターとして生徒に伴走する役割を担う。端末を単なる検索道具ではなく「考える・伝える道具」へと質的に転換し、既習知識を別の文脈で活用する思考力・判断力・表現力を育むことを目的としている。実践上のルールとして、相手を意識した表現物を制作・掲示することを重視する。また、校長や教頭を含む全教員が授業に参加し、生徒の学習を多角的にサポートする体制を整えている。



(Chromebook を使いながら
話し合いをする様子)

(2) 【研修改革①】個人テーマ研修

従来の一律・受動的な研修スタイルを廃し、教員一人一人が「学習者主体の授業」や「対話の活性化」といった独自のテーマを設定する「個人テーマ研修」を導入した。教員自身が「試行錯誤する学び手」として、日々の小さな実践や失敗を共有する仕組みを整えている。これにより、授業改善が個人の努力のみに依存する現状を改善し、全教員が主体的に研究を深め、授業の質を向上させる土壌を構築した。

A 学習者主体の授業づくりの視点	B 思考力、判断力、表現力等の育成の視点
1 自己選択・自己決定の場面の設定	1 既習事項を活用した思考判断の場面の設定
2 振り返りを行わせ、子供が自身の学びや成長を価値づける場面の設定	2 対話を通じた表現の場面の設定
3 生徒の活動時間の十分な確保とファシリテーター的な役割の充実	3 相互参照・比較を生かした個人の考えの練り上げの場面の設定
	4 学習内容を別の場面で応用する課題や発展的な課題の設定

共通実践事項（授業者がA,Bからそれぞれ選択して設定）

(3) 【研修改革②】語り合う研修と校務DX（組織文化の変革）

研修を「聴く」形式から対話を軸とした「語り合う研修」へと転換した。校務DXの推進によって教員の時間的・心理的ゆとりを創出し、その時間を対話に充てている。Padlet等のツールを活用した報告会では、成功例だけでなく「失敗授業」もフラットに共有・称賛し合える文化を醸成した。この取組により、授業について気軽に語り合える雰囲気醸成された。



(4) 【文化改革】生徒会・地域連携における表現の高度化（個人テーマ研修「報告会」の様子）

生徒会選挙における「討論会形式」の導入や、専門部による動画制作を用いた啓発活動を展開した。また、授業や探究活動の成果をSNS（Instagram）で外部へ発信するなど、学校生活全般において「多角的な自己表現の機会」を構築した。これらの取組により、実践的な情報リテラシーの育成が図られるとともに、他者からの肯定的な反響が生徒の自己有用感の向上に大きく資する結果となった。

5 研究のまとめ

(1) 成果

客観的な指標では、全国学力・学習状況調査の「思考・判断・表現」に関する設問で正答率が向上し、特に「自分の考えを根拠とともに記述する」項目の肯定回答が全国平均を大きく上回った。授業では生徒の成果物を軸にした話し合いが活性化し、教員組織においては、Google事例校に認定されるなどICT活用の先進性が認められた。経験年数にかかわらず、全教員が同僚性を発揮し、授業改善に向けた建設的な対話を継続する「学び続ける組織」へと進化を遂げた。

(2) 課題

生徒の思考について、既習知識を別の文脈で活用し、自らの考えを練り上げながら新たな意味や価値を創造するなどの「質の高い思考」へといかに昇華させるかが今後の課題である。具体的には、生徒の多様な意見を収束させ、より高次の概念へと導くための教員の「問い」の質の向上が求められる。また、本校で培った「アウトプット中心の学び」のノウハウを、どのようにして次なる教育現場へ汎用化し、継承していくかが最大の課題である。

6 今後の取組

「最後まで学びを止めない学校」として、閉校までの期間を、これまでの実践を精緻化する期間と位置付ける。第一に、生徒一人一人のポートフォリオを充実させ、本校での学びの軌跡を生徒自身の自信へとつなげる。第二に、生成AIを含む先端技術を更に深く授業に取り入れ、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現を加速させる。第三に、閉校という節目を、学びの終わりではなく、新しい教育の形を地域や次代へつなぐ「バトンパス」の機会と捉え、挑戦を継続していく。